



即効性の魔法

高森さんは魔法使いではないか、と時々思う。高森さんの話を聞いていると、それがホントなら、まるで奇跡ではないか！という逸話が次から次へと飛び出してくるのだ。

「息子が一切の治療を拒否して困り切ってたお母さんがいたんです。お母さんは、病院に何とか連れて行き、医者 앞에서“あなたは私の一番大切な宝物なんだ”って大声で言った。それから息子さんは治療を受けるようになったのよ」

こんな魔法話を聞かたび私はそんなことがあるのだろうか、と思ってしまう。もちろん、そうした話は高森さんの「家族SST」を受けた人たちの実話だ。どうやら高森さんの魔法には即効性があるらしいのである。

父親への複雑な思い

高森さんは、幼いころから父親がきらいでしかたがなかったという。父親はアルコール依存で、毎晩遅く帰宅する。13歳のときには父親がいやで自殺企図さえした。高森さんが31歳のとき、父親が亡くなったのだが、後々まで高

森さんのなかで父親の存在は複雑にからまり、その糸にがんじがらめにしばられていく。

青春期、静岡で小学校の教師を2年間務めた高森さんは、上京して叔母が経営する幼稚園の先生となった。この幼稚園での経験が現在の仕事にとっても活かされている。

「子どもの気持ちを集中させるために、いろいろと工夫を重ねました。それに本当に人を育てるっていう意味をきちんと知らないとやれません」

創造美育協会との出会い

人を育てること——高森さんがその意味を考えていたこの時期に、人生を左右する出来事にでくわす。久保貞次郎・北川民次・滝口修造などの戦後美術の啓蒙家が参加した創造美育協会との出会いである。創造美育協会はイギリスのレインやニールの教育の実践をめざし、美術を通して、子どもの心を育てる活動をしていた。「最もよい教師とは子どもと共に笑う教師である」とはニールの言葉だ。

「ただ単に、歌や折り紙を教えて、というだけではなくて、一人の人間を育てる、という指針を持つことができた

んです」と高森さんは語る。

その後、協会の同志と結婚した高森さんは出産を機に幼稚園を退職する。しかし、子どもにのめりこみすぎてはいけないうちの思い、子育てをしながら自宅で画塾をはじめ、創造美育協会で学んだ考え方を実践した。

「問題児」といわれている子どもを集め、15年間にわたり、画塾を続けた。高森さんは、子どもたちをほめながら、自信をつけさせる一方で、母親教育を熱心に行った。それが今の家族のSSTの原点ともなった。

突発性難聴になって

15年間画塾を続けたが、引っ越しを機にやめることになる。そんなある日、突発性難聴になってしまう。今でも左側の耳は耳鳴りしか聞こえない。「外から見えない障害」をもつようになった高森さんは「心の中の不自由さを訴えることのできない人のつらい気持ちを通訳のように誰かに橋渡しができないか」と思った。

そして、父親との関係も整理ができていないし、徹底的に自分のことも知ろう、とカウンセリングを学び始めた。セルフカウンセリングを学ぶなかで、「父親はこうあるべきだ」というフィル

ターを通して、父親を見ていた自分に気付く。フィルターを取り払い、客観的に振り返ると、娘にきらわれ、孤立しているみじめな父親の姿がうかびあがった。そのとき初めて、かわいそうな父親の姿の存在に気が付いた。

セルフカウンセリングで自分のなかの風通しがよくなり、ようやく父親からの呪縛が解けてきたのである。

家族SST、はじまる

その後、カウンセラースクールで講師をするようになり、そのときに、世田谷の家族会を手伝ってもらえないか、と声をかけられた。家族会にかかわって2年がたったころ、東京都精神障害者家族会連合会から、SSTをやってほしいと要請された。

SSTは「生活技能訓練」と訳されている。「訓練」というものは自分の生き方から反している」と、初めのうちはSSTにかかわることを拒んでいた。しかし、SSTを見学してみると、かつて画塾で実践していたことが体系的に整理されていると直感し、「これだ！」と思った。

SSTの研修を受けた高森さんは作業所などでSSTを行うようになった。やがて、SSTを受けさせようと子どもを連れてくる親たちが、子どもがいる場ではグチも話せず、親自身の不満が高まってしまうことに気づく。そこで、家族を対象としたSSTをやってみようと思いついたのである。

ビタミン・アイ

その後、12年を経て、高森さんの家族SSTは口コミでどんどん広がり、現在では、毎日どこかでSSTを行っている。高森さんの肩書きは「SSTリーダー」。リーダーとはSSTをやるとき役割の名称にすぎない。肩書きがきらいだ、という高森さんらしい。

高森さんの家族SSTは一つの「芸風」を確立している、と私は思っている。誰かに技術を伝える際に、単にマニユ

アル通りに情報を伝えるだけでは限界があるはずだ。その限界を突破できるかどうかは、自分なりに工夫を重ねることができると、ということにかかっている。ある人が高森さんのSSTを見て、「他の人にはマネのできない一世一代の芸のようだ」と言ったのだが、私もその通りだと思う。マニュアルを超えた高森さんの味付けがたっぷりとされているからである。

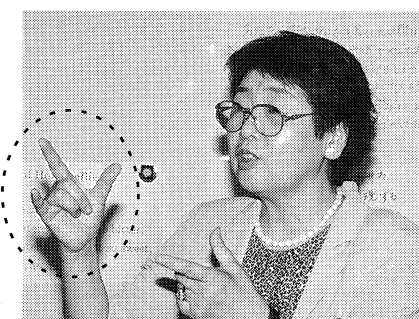
高森さんが家族SSTで必ず伝えることがある。「ビタミン・アイ」だ。「アイ」は日本語の「愛」をかけている。まず、手話の「アイ・ラブ・ユー」の形をみんなに覚えてもらう。「今日、うちに帰ったら、早速これをやってみて」と言うと、家族は照れくさそうに笑う。家族にとって必要なことは、「あなたのことを大切に思っている」という気持ちを相手にわかるように伝えることだ、と高森さんは述べる。子どもは、自分の気持ちをわかってもらえた、と感じたときに、愛されている、と感じるという。

愛の形をつくる

高森さんに、家族SSTを1回だけやるとしたら、何をしますか、と聞いたところ、「傾聴ですね」とのことだった。傾聴は、相手の気持ちを受け止めているよ、という一番のサインになるからである。

抱え込みの危険性についても高森さんは指摘する。子どもを愛するがゆえに、口やかましく干渉したり、本人ができることでも、親が手を出してやってしまう。しかし、それは結局、自分の利害としての——いい子になってほしいという——打算的な愛ではないか、と分析する。SSTは、それ以前の純粋な愛を伝えるテクニックを教える。SSTは行動療法だから、外側を愛っぽくやれば、本来の愛が育つ、というのである。

家族SSTを見学したときのことで。「人生楽ありや、苦もあるさ」という水戸黄門のテーマ曲を「どんぐりころころ」の節で歌ってみましょう、とみんなで歌い出した。重々しい曲が楽しげ



これが“I Love You”のサイン

で軽やかな歌に早変わりする。家族からも笑い声があがる。これが愛の外側の原理だ。形を変えることで気持ちまで変わるのだ。親子のように関係が緊密な場合は、自然に愛を伝えあう関係にするには時間がかかる。だから、外側から始める。それによって、相手は愛をもらった、と感じてくれるのだという。

なるほど——と思った。この話を聞いて、高森さんの魔法には即効性があることに、ようやく得心がいった気がしたのである。そして驚くべきことに、外側を作り替えると、家族が本来もっている愛がよみがえるというのだ。即効性があったとしてもすぐに効き目がなくなるような手品にすぎないが、これは解けない魔法だ。

父親との関係にずっと悩み、創造美育協会で子どもを育てることの意義を学んだ高森さん。だからこそ、愛を伝えることの大切さをみごとに「高森式」といってもいい「芸風」に育てることができたのではないか。

5年前、入院して手術を受けた。死ぬかもしれない状況だった。「だから、今日の1日が最後かもしれない、明日はないかも、いつも真剣勝負なんです」と述べる。まさに一期一会の精神だ。「最近、養護学校とか、子育てセミナーとか、精神障害者以外の新しい仕事が無い込んでくるようになったんですが、それが楽しいんです。私の何を必要としているのかをそのつど考えますからね」とニコニコ笑う。きっと、どうすれば新しい需要に応えられるか、別の魔法を頭の中で仕込んでいるのだろう。

(取材：丹羽大輔・全家連制作部)